学位論文抄録

FAP 症例における生命予後に対する肝移植の効果の検討
(Impact of liver transplantation on survival in familial amyloidotic polyneuropathy patients.)

岡 本 定 久

指導教員

内野 誠　教授
熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経内科学

学位論文抄録

[目的] FAPに対する肝移植療法は、現在唯一の病態抑制的治療法である。良好な栄養状態で肝移植を行ったスウェーデンのFAP症例は、非移植群と比較し生存率の有意な改善を認めている。しかし、その報告において、栄養状態を考慮し手術適応を変更した後の症例群は、少数であり観察期間も中央値5年と短く十分な解析がなされていなかった。また、発症時年齢、性別が肝移植症例の生存率に与える影響を非移植例と比較検討した報告もない。本研究では、発症時年齢、性別に注目し、スウェーデンにおける非移植例と肝移植例の長期生存率の比較検討を行った。

[方法] 対象は、1973年から2008年6月の間にスウェーデン、ウメオ大学を受診した肝移植群108例、非移植群33例。Kaplan-Meier生存分析を用いて、両群の解析を行った。肝移植群は、移植が開始された1990年から1995年まで病状を考慮せず移植を行っていた前期移植群と、1996年以降栄養状態を手術適応とした後期移植群に分類した。発症時年齢は、50歳未満の若年発症群と50歳以上の高齢発症群に、移植時罹病期間は7年未満と7年以上の2群に分類した。性別、発症時年齢、移植時罹病期間における生存率の違いについても検討した。

[結果] 肝移植群の生存率は、非移植群と比較し有意に上昇していた($p<0.001$)。若年発症群における肝移植群の生存率は、非移植群と比較し更に良好な結果であった ($p<0.001$)。一方、高齢発症群における生存率は、肝移植群と非移植群の間に有意差を認めなかった。肝移植群における性別と発症年齢の生存率に対する影響を調べた結果において、高齢発症男性群の生存率は、高齢発症女性群と比較し有意に低くなっていた ($p=0.02$)。一方、若年発症男性群における生存率は、若年発症女性群との間に有意差を認めなかった($p=0.33$)。肝移植時罹病期間が7年未満と7年以上の2群間において、生存率に有意差を認めなかった。

[結語] FAP患者に対する肝移植は、生存率を上昇させる。しかし、高齢発症男性例では、非移植例と比較し生存率の改善は認めない可能性があり、この原因について検討するとともに新たな治療戦略が必要である。